東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2009年2月13日

私たちの周囲の奇跡

　ムスリムの皆様、崇高なるアッラーは人間を創造され、そしてしもべとして服従することを求められます。ただ、人は、この世への過度の傾斜、無知、そしていろいろな理由をこじつけたりして、時としてアッラーを忘れ、その結びつきを絶つことをしてきました。本来の性質としてもつ、信じる心、庇護を求める心といったものは、自分たちでアッラーの位置にすえた神々によって満たしたのでした。偉大なるアッラーは、このような状態において、忠告の為、預言者たちを遣わされました。この預言者たちの一部には、啓典が下されました。また一部は、その民の状況に応じた奇跡を行ないました。私たちの預言者の最大の奇跡は、クルアーンです。アッラーは、この件について、雌牛章第２３節で次のように仰せられておられます。「もしあなたがたが、わがしもべ（ムハンマド）に下した啓示を疑うならば、それに類する１章〔スーラ〕でも作ってみなさい。もしあなたがたが正しければ、アッラー以外のあなたがたの証人を呼んでみなさい。」ご存知のように、奇跡とは、不可思議で、同じことをやろうと思っても不可能な出来事のことです。この観点からも、クルアーンは、最後の審判の日まで、奇跡であり続けるのです。クルアーンが書物として奇跡であると同時に、人々が熟考することによって気づくことの出来る奇跡も、無数にあります。家畜章第７６～７９節において、「夜（の暗闇）がかれを覆う時、かれは一つの星を見た。かれは言った。『これがわたしの主です。』だが星が沈むと、かれは言った。『わたしは沈むものを好みません。』次いでかれは月が昇るのを見て、言った。『これがわたしの主です。』だがそれが沈むと、かれは言った。『わたしの主がわたしを導かれなかったら、わたしはきっと迷った民の仲間になったでしょう。』次いでかれは太陽が昇るのを見て、言った。『これがわたしの主です。これは偉大です。』だがそれが沈むと、かれは言った。『わたしの人びとよ、わたしはあなたがたが、崇拝する者と絶縁します。わたしは天と地を創られた方にわたしの顔を向けて、純正に信仰します。わたしは多神教徒の仲間ではない。』」と説明されています。

　親愛なるムスリムの皆様。宇宙の世界の作用は、人の力を超越したものです。地球が自転しつつ、太陽の周りで公転を行なっていること、北極星が常に北に位置していること、風や季節の存在、果実がそれぞれ異なった風味を持っていること、これらの一つ一つが、それぞれ奇跡ではなければ何だというのでしょうか。蜂が、嫌がることなく蜜を集めること、アヒルの子が卵からかえるとすぐ、泳げること、牛が嫌がることなく乳を与えること、など、何千種もの動物たちが、何の教育を受けることもなく、それぞれの任務を最良の形で果たしていることは、アッラーの奇跡でなくて何でしょうか。クルアーンにおいても、この世界のこの無数の奇跡に注意を向けるよう示されています。そのうちの一つを例としてここで紹介し、本日のフトバを終えたいと思います。雌牛章第１６３節で次のように仰せられておられます。「本当に天と地の創造、昼夜の交替、人を益するものを運んで海原をゆく船の中に、またアッラーが天から降らせて死んだ大地を甦らせ、生きとし生けるものを地上に広く散らばせる雨の中に、また風向きの変換、果ては天地の間にあって奉仕する雲の中に、理解ある者への（アッラーの）印がある。」アッラーが私たちを、この章句で現されているようなことを理解し、この世界のあり方からメッセージを読み取れるような人に私たちをしてくださいますように。